

月刊日本

9

北方四島・竹島・尖閣諸島

領土紛争はアメリカが仕掛けた

菅沼光弘

沖縄は日本のごみ捨て場なのか!!

山崎行太郎

自立を阻む日米安保体制

木村三浩

右からの脱原発・麗しき山河を守れ

針谷大輔

脱原発こそ対米自立の第一歩

藤井厳喜

「天皇制」が生き残るには

松本健一



資源大国化のチャンスを見逃すな

韓国による竹島領海での調査は許さない！

衆議院議員

新藤義孝



前回、わが国のエネルギー自給の切り札として期待されるメタンハイドレートとは何か、なぜ日本海側の開発が後回しにされてきたのかを考えた。今回は、独立総合研究所が実施した日本海のメタンハイドレート調査航海に同行した新藤義孝衆議院議員に、わが国の資源開発の在り方やメタンハイドレートをめぐる周辺諸国の動向などについて聞いた。

資源開発は関連産業の発展をもたらす

——メタンハイドレート開発についての政府、行政の取り組みをどう見ているか。

新藤 各国が資源確保戦略を加速させる中で、わが国も資源確保を戦略的に推進する必要がある。我々自民党は「国家基幹技術としての海洋地球科学技術を推進する議員連盟（海洋ロマン議連）」を結成し活動してきた

が、党経済産業部会の中に「資源確保戦略に関するプロジェクトチーム」を設置、六月中旬に「資源の確保の推進に関する法律案」を議員立法として国会に提出した。海洋資源や都市鉱山など新たな資源戦略を国家として定め、戦略の実施に必要な財政上の措置を取るための法律だ。この法案に盛り込まれた考え方は、次の選挙での自民党の公約の柱の一つとなる。八月二日には自民党議員からなる「資源確保戦略推進議連」を立ち上げた。

——独立総合研究所代表の青山繁晴氏は政府の動きが鈍いと危機感を抱いているが、これは大きな前進だ。新藤 我々が提出した「資源の確保の推進に関する法律案」に、与党も反対する理由はないだろう。ただ、いまの民主党政権には資源確保戦略が欠如していると言わねばならない。資源探査船「ちきゅう」は、今年三月に愛知県の渥美半島沖南海トラフで世界初となるメタンハイ



「ちきゅう」

ドレートの海洋産出試験に成功した。にもかかわらず、今年度の「ちきゅう」の運営予算は百十億円から百億円の10%削減してしまった。

例えば民主党政権は、小惑星探査機「はやぶさ・2」の開発についても、自民党・麻生政権が十七億円の予算要求をしていたものを政権交代後、仕分けて三千万円にカットした。その後、予算を増やしたものの今もって十分な予算をつけようとしていない。何が戦略分野かを判断できない人たちが、政権を担っている。

私たち自民党は、資源を開発するだけではなく、関連産業の育成という視点も持っている。私は今年の3月、メタンハイドレートの海洋産出試験に成功して静岡県清水港に戻った「ちきゅう」に乗り込み、状況を観察した。

そのときにわかったことは、調査に使用されている設備や機械、クレーン、ドリル、工具資材などの多くが外国製だったことだ。日本製造業の高い技術力を持つてすれば、これらの部品や工具を国産開発することは充分可能であり、製造業の需要

を増やすことができる。私の地元は、鋳物や機械産業が集積した埼玉県川口市だが、うちの組合に頼めばすぐに作れる形状をしていた。

資源開発に関わる様々な産業を興せば、そこで新たな雇用を生み出すことができる。かつて、炭鉱に関わる産業によって一つの町ができたように、新たな海洋資源開発に関わる産業を育成していくことによって、大きな波及効果が期待できるはずだ。日本が持っている高い技術力を駆使して関連産業を振興すれば、資源開発関連の製品を世界に輸出することもできる。海洋資源開発に関連する産業を振興することは、日本経済を復活させるための大きな柱になると認識すべきだ。

スカイツリーより大きなメタンハイドレートのタワー

——日本海側のメタンハイドレート開発が後回しにされてきたのはなぜか。

新藤 日本海側の開発についての行政の対応が不十分だったのは確かだ。青山繁晴氏らの危機感もそこにある。ただ、日本海側のメタンハイドレートの存在が確認されたのは、まだ十年くらい前であり、政府としては、それ以前から調査していた太平洋側を先に始めた、というのが実情だと思う。

私は、六月七、八日、独立総合研究所が実施した日本

海のメタンハイドレート調査航海に同行したが、柱のように立ち昇るメタンハイドレートのブルーム（粒）を何本も確認することができた。このブルームは水深約千メートルから湧き上がっており、その大きさは幅百三十メートル、高さ六百〜七百五十メートルという巨大なものだ。日本海の海中に、東京スカイツリーより大きなメタンハイドレートのタワーが何本も立ち昇るといって、壮大な模様を国会議員として初めて現場で確認してきた。

太平洋側のメタンハイドレートは、太古からの微生物の堆積により生成された「生物分解起源」であり、採取すればやがて無くなる有限のものだ。これに対して日本海側のメタンハイドレートは、地球（マグマ熱の噴出）活動によって生成された「熱分解起源」であることが分かっている。地球が存在する限り無限に生成される可能性があるとされている。

私は青山さんにも約束したが、この日本海側のメタンハイドレートについて、まず分布調査から始め、どのように採取し、資源ガスとして商業活用できるのか、産出・生産手法を確立するための調査・研究が必要となる。これを政府が推進していくよう働きかけていくことが政治の役割だと考えている。その推進方策として法律を作

り、議連による活動を行っている。

世界第6位の海洋国土面積を活かせ！

—— 青山氏は、周辺諸国がメタンハイドレート開発に乗り出していることに危機感を抱いている。韓国は、昨年英国エンジンバラで開かれた国際ガスハイドレート学会で、二〇一四年までに竹島の南でメタンハイドレートを実用化すると発表した。

新藤 わが国は二〇〇一年にメタンハイドレートの開発計画を立てたが、韓国はその三年後の二〇〇四年に十カ年計画を策定、二〇一五年商業生産の開始を目指している。

韓国石油公社などの政府系の機関がメタンハイドレート実用化に向けて動き、二〇〇七年と二〇一〇年に掘削の実験を行った。しかし、未だにメタンハイドレートを実用化する有望なエリア、濃集帯を発見するには至っていないのが現状だ。

—— 韓国が竹島の南側でメタンハイドレートの調査に乗り出すようなことはないのか。

新藤 韓国は鬱陵島（ウルルン島）の周辺では調査をしているが、現時点で竹島の南側で調査が行われていることは確認できていない。